

# 「ふつう」であることの安心感(1)：集団内における関係性の観点から<sup>1)</sup>

## Are Normative Japanese Happy?: The Effect of Being Middle among Various Relationships

佐野 予理子 SANO, Yoriko

● 国際基督教大学大学院教育学研究科  
Graduate School of Education, International Christian University

黒石 憲洋 KUROISHI, Norihiro

● 日本教育大学院大学  
Japan Professional School of Education

**Keywords** 「ふつう」, 遂行水準, 関係性  
“Futsu”, performance level, relationship

### ABSTRACT

日本人が周囲との関係性の調和に関心を持ち、「ふつう」であることを重視することは数多く指摘されている。しかしながら、そうした傾向を実証的に示した研究はほとんどみられない。そこで本研究は、周囲の他者との比較に基づく遂行水準が「ふつう」認知と感情状態に与える影響を場面想定法の質問紙調査によって検討した。研究1では周囲の他者との関係性を操作し、研究2ではある程度の相互作用を行う他者を想定し、その親しさの程度を操作した。概して、研究1・2ともに自らの遂行水準が「ふつう」であるときに最も「ふつう」認知および安静状態が高い一方、否定的感情が最も低い傾向がみられた。こうした傾向は、関係性の調和に敏感でいなくてはならない間柄において顕著だった。日本人は周囲の他者と比較して自らの遂行水準が「ふつう」であることで安心感を得ていることが示された。

Purpose of the present study was to investigate the effect of performance level (i.e. superior, middle, or inferior) on “futsu” cognition and emotion among various relationships. Two studies manipulated kind of relationships (study1) and the degree of intimacy with friends (study2). In the study1, “middle” performance

level condition revealed relatively higher calmness and lower negative emotion than “superior” or “inferior” condition despite kind of relationships. In the study<sup>2</sup>, the same tendency as study<sup>1</sup> was indicated except high-intimacy condition. Japanese intended to be “middle” because of deep concern with maintaining their relationships. This tendency was notable especially among moderate intimate relationship. Furthermore, respondents in “extreme superior” performance level condition indicated lower calmness than “superior” or “middle” condition. It was suggested that extreme high performance imply diversity with others, therefore people feel uneasy at their disharmony among reference group.

## 1. 問題

長年、日本人論や日本文化論については様々な視点から研究され、論じられてきた (e.g., 阿部, 2002). 特に比較文化心理学や文化心理学では、異文化との比較を通して日本人や日本文化の特徴を検討してきた (e.g., 高田, 2004). そこでは、周囲の他者との関係性の調和を重視する日本人の姿が共通して指摘されている。例えば、日本人は、周囲の他者との関係に埋め込まれた存在として自己を捉え (Markus & Kitayama, 1991), みんなと一緒にであろうとする規範を持つ (元橋, 1993). さらに、日本人は関係に配慮するが故に自己卑下を行う (村本・山口, 1997). また、日本人の精神的健康に関しては、他者からの受容感が主観的幸福感と関連し (Kitayama & Markus, 1994), 他者との関係性が精神的健康を規定することが示唆されている (遠藤, 1995).

このような知見をふまえると、日本人は周囲の他者との関係性の調和を重視するため、他者と変わっていないこと、すなわち「ふつう」であることを志向すると言える (大橋・針原, 2000; 元橋, 1993). しかしながら、「ふつう」であることそれ自体が日本人にとって望ましいことを示す研究はほとんどみられない。むしろ、遂行領域における「ふつう」に関して検討した研究では、他者と比較された成績が「ふつう以上」であることが自己評価や自尊心の高さに結びつくことが示されている (e.g., 高田, 2000; 大橋, 2006). 例えば高田 (2000) は、他の大学生と「同等である」という成績フィードバックをされた人は、「優位である」というフィードバックをされた人と同程度の

満足感や愉快さ、沈鬱さを報告したことを示している。さらに、佐野・黒石 (印刷中) は、能力水準が「優れている」「ふつう」「劣っている」いずれかのフィードバックを与えた結果、「劣っている」とフィードバックされた人よりも「優れている」「ふつう」とフィードバックされた人の方が状態自尊心は高く、感情状態もポジティブなものだったことを示した。先行研究が指摘するこうした結果は「ふつう以上」がポジティブな影響をもたらすことを示しているのみである。しかしながら、前にも述べたように、日本人は周囲との距離感に敏感であるために「ふつう以上」ではなくまさに「ふつう」であることに価値を置き、「ふつう」であることが望ましい意味を持っていることが考えられる。こうした観点を明確に示した実証研究はほとんど見られない。

日本人が周囲の他者との関係性の調和を維持することを重視するが故に「ふつう」であることを志向するとするなら、そうした周囲の他者がどのような人々であるかは非常に重要であるはずである。実際、「よくは知らない顔見知り」や「友人」といった関係性の違いによって人々が示す自己卑下が異なることが示唆されている (石黒・村上, 2007). 先行研究 (大橋, 2006; 高田, 2000; 佐野・黒石, 印刷中) は、比較となる他者は一般的な大学生であり、そこでの「ふつう」さが重大な意味を持たなかった可能性が考えられる。自らの「ふつう」さが意味を持つのは、関係の調和の維持に敏感でいなくてはならない他者との比較においてであろう。実際、周囲の他者を明確に規定した状況では、自らの遂行水準が「ふつう」である

ときは「優れている」「劣っている」ときと比べて安静状態が最も高く、否定的感情が低くなること示されている (e.g., 佐野・黒石, 2006).

そこで本研究では、比較となる他者を明確に規定し、遂行領域において自らの成績が優れている、「ふつう」、劣っていることが「ふつう」認知および感情状態に及ぼす影響を検討する。

## 2. 研究1

周囲の他者が「初対面」である場面および「友人」である場面において自らの遂行水準が高い場合、同程度である場合、低い場合における「ふつう」認知および感情状態について検討した。

### 2.1 方法

#### 2.1.1 要因計画

大学生を対象に場面想定法を用いた質問紙調査を行った。回答者自身が主人公となるストーリーを呈示し、その場面においてどのように思うか尋ねた。関係性2(初対面・友人)×地位3(高・中・低)の2要因被験者間計画。

#### 2.1.2 質問紙

大学の友人6人とパッケージのアルバイトを行う場面を設定し、周囲の他者が初対面であるのか友人であるのかを操作した。また、周囲の他者と比較した作業成績によって地位を操作した。同僚たちの作業成績は50～60個とし、主人公の作業成績は、高条件では73個、中条件では54個、低条件では37個とした。以上のいずれかの場面を呈示し、その場面における感情状態および「ふつう」認知を尋ねた。感情状態は、肯定的感情・否定的感情・安静状態の3因子からなる一般感情尺度24項目(小川・門地・菊谷・鈴木, 2000)によって測定し、「ふつう」認知は独自に作成した9項目(「なじんでいる」「ふつうである」など)によって測定した(いずれも5件法)。最後に操作チェックとして具体的に場面を思い浮かべられたか回答させた(すべて5件法)。

## 2.2 結果

大学生187名(男性68名, 女性118名, 不明1名)、平均年齢19.61歳( $SD = 1.59$ )を対象に分析を行った。理論的中央値(3)との比較の結果、場面は具体的に想像されていた( $t(186) = 9.24, p < .001$ )。まず、各条件における「ふつう」認知( $a = .85$ )、感情状態の各下位因子(肯定的感情  $a = .94$ ; 否定的感情  $a = .91$ ; 安静状態  $a = .89$ )の平均値および標準偏差を算出した(表1, 2, 3, 4)。

はじめに「ふつう」認知に関して、平均値を従属変数として関係性2×地位3の分散分析を行ったところ、地位の主効果が見られた( $F(2,181) = 47.04, p < .001$ )。中条件が最も「ふつう」認知が高く、次いで高条件、低条件の順に「ふつう」認知は高かった。また、関係性の主効果の有意

表1 各関係性における「ふつう」認知(SD)

|     | 高           | 中           | 低           |
|-----|-------------|-------------|-------------|
| 友人  | 3.73(.60) a | 4.00(.56) a | 2.73(.57) b |
| 初対面 | 3.42(.66) a | 3.68(.64) a | 2.86(.60) b |

註)異なる添え字は5%水準で有意差があることをしめす

表2 各関係性における肯定的感情(SD)

|     | 高           | 中            | 低           |
|-----|-------------|--------------|-------------|
| 友人  | 3.78(.79) a | 2.68(1.01) b | 1.70(.67) c |
| 初対面 | 3.11(.95) a | 2.29(.91) b  | 1.88(.81) c |

註)異なる添え字は5%水準で有意差があることをしめす

表3 各関係性における否定的感情(SD)

|     | 高           | 中           | 低           |
|-----|-------------|-------------|-------------|
| 友人  | 2.30(.72) b | 1.91(.79) c | 3.42(.85) a |
| 初対面 | 2.22(.81) b | 2.17(.98) b | 3.32(.89) a |

註)異なる添え字は5%水準で有意差があることをしめす

表4 各関係性における安静状態(SD)

|     | 高           | 中           | 低           |
|-----|-------------|-------------|-------------|
| 友人  | 2.58(.84) a | 2.57(.98) a | 1.83(.65) b |
| 初対面 | 2.18(.90)   | 2.35(.82) a | 1.93(.74) b |

註)異なる添え字は5%水準で有意差があることをしめす

傾向が見られた ( $F(1,181) = 3.62, p < .10$ )。初対面場面より友人場面の方が「ふつう」認知は高かった。関係性×地位の交互作用傾向も見られた ( $F(2,181) = 2.59, p < .10$ )。友人場面においても初対面場面においても低条件において最も「ふつう」認知が低かった (図1)。

次に感情状態に関して、因子ごとの平均値を従属変数とした関係性2×地位3の分散分析を行った。肯定的感情に地位の主効果 ( $F(2,181) = 56.24, p < .001$ )、関係性の主効果 ( $F(1,181) = 4.87, p < .05$ )、交互作用が見られた ( $F(2,181) = 3.68, p < .05$ )。高条件が最も肯定的感情が高く、次いで中条件、低条件、の順だった (図2)。また、初対面場面より友人場面の方が肯定的感情は高かった。否定的感情において地位の主効果のみ見られた ( $F(2,181) = 42.06, p < .001$ )。低条件は中条件および高条件より否定的感情が高かった (図3)。安静状態において地位の主効果のみ見られた ( $F(2,181) = 8.81, p < .001$ )。高条件および中条件は低条件より安静状態が高かった (図4)。

### 2.3 考察

自らの遂行水準が高いほど肯定的感情が高くなることは、高田 (2000) などの結果と整合する。本研究は、周囲の他者と同等、すなわち「ふつう」であるときに否定的感情が低いことが示した。「ふつう」であるときだけでなく、高い遂行水準であるときにおいても安心感を得ていたことが示唆され、高田 (2000) や佐野・黒石 (印刷中) と整合する結果が見られた。しかしながら、日本人が周囲との関係性の調和に関心を払うのであれば、まさに「ふつう」である状態において安心感を覚えるはずである。研究1では、周囲の他者が「初対面」であるか「友人」であるかといった関係性の要因は感情状態や「ふつう」認知にほとんど影響を及ぼさなかった。単に「友人」と表記するだけでは十分な影響力を持たなかったために「初対面」場面との相違が明確に得られなかった可能性が考えられる。そこで、研究2では、ある程度の相互作用を行う関係を想定し、関係性の程度を考慮した検討を行った。

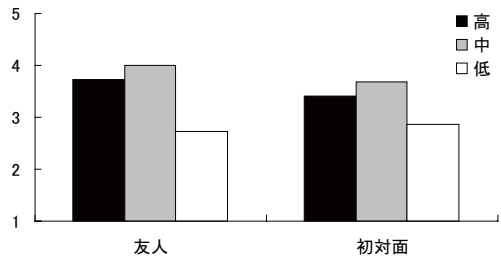


図1 各関係性における「ふつう」認知

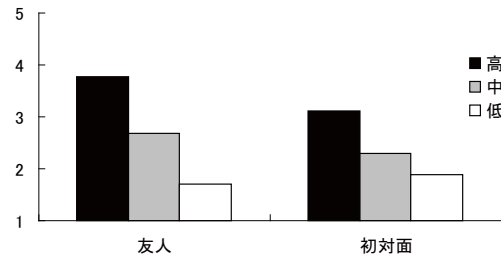


図2 各関係性における肯定的感情

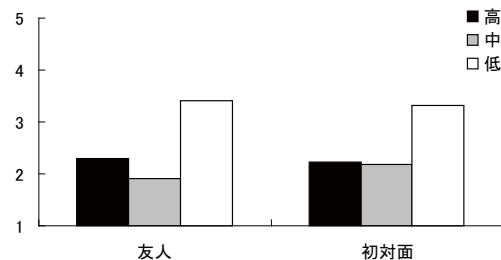


図3 各関係性における否定的感情

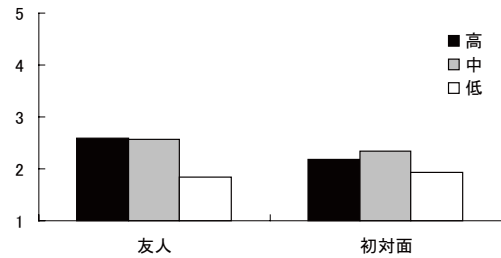


図4 各関係性における安静状態

### 3. 研究2

研究2では、自己に影響を及ぼす周囲の他者として、日常的にある程度の相互作用を行う友人関係を想定し、「ふつう」認知と感情状態の関連を

検討した。さらに、周囲の他者からのズレの程度の効果をより詳細に検討するため、高・中・低に加え、成績が極端に高い場合および極端に低い場合を加えた。

### 3.1 方法

#### 3.1.1 要因計画

大学生を対象に場面想定法を用いた質問紙調査を行った。回答者自身が主人公となるストーリーを呈示し、その場面においてどのように思うか尋ねた。関係性3（近・中・遠）×地位5（極高・高・中・低・極低）の2要因被験者間計画。

#### 3.1.2 質問紙

大学の友人6人とパッケージのアルバイトを行う場面を設定し、友人たちとの親しさによって関係性を操作した。関係性近条件は、互いに何でも話せ、放課後や休日に遊びに行くことも多い間柄とした。関係性中条件は、休み時間には雑談をする程度の間柄であるとした。関係性遠条件は、個人的な話をすることもなく、学外で会ったりすることがほとんどない間柄であるとした。また、友人たちと比較した作業成績によって地位を操作し

た。友人たちの作業成績は50～60個とし、主人公の作業成績は、極高条件では103個、高条件では73個、中条件では54個、低条件では37個、極低条件では8個とした。以上のいずれかの場面を呈示し、その場面における感情状態および「ふつう」認知を尋ねた。感情状態は、肯定的感情・否定的感情・安静状態の3因子からなる一般感情尺度24項目（小川ほか、2000）によって測定し、「ふつう」認知は独自に作成した9項目（「なじんでいる」「ふつうである」など）によって測定した（いずれも5件法）。最後に操作チェックとして具体的に場面を思い浮かべられたか回答させた（すべて5件法）。

### 3.2 結果

大学生264名（男性121名、女性143名）、平均年齢20.06歳（ $SD = 1.25$ ）を対象に分析を行った。理論的中央値（3）との比較の結果、場面は具体的に想像されていた（ $t(263) = 2.98, p < .01$ ）。まず、各条件における「ふつう」認知（ $a = .82$ ）、感情状態の各下位因子（肯定的感情  $a = .82$ ；否定的感情  $a = .87$ ；安静状態  $a = .77$ ）の平均値および標準偏差を算出した（表5、表6、表7、表8）。

表5 各関係性における「ふつう」認知（SD）

|      | 極高         | 高          | 中          | 低          | 極低         |
|------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 関係性近 | 3.40(.46)a | 3.43(.33)a | 3.10(.19)b | 2.80(.33)c | 2.52(.53)d |
| 関係性中 | 3.35(.84)c | 3.68(.51)b | 3.93(.54)a | 3.04(.92)d | 2.36(.75)e |
| 関係性遠 | 3.23(.49)c | 3.50(.61)b | 3.87(.75)a | 2.91(.68)d | 2.36(.49)e |

註)異なる添え字は5%水準で有意差があることをしめす

表6 各関係性における肯定的感情（SD）

|      | 極高          | 高           | 中           | 低           | 極低         |
|------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| 関係性近 | 2.81(.51)   | 2.99(.39)   | 2.95(.47)   | 3.14(.37)   | 3.17(.40)  |
| 関係性中 | 3.34(1.03)a | 3.28(.93)ab | 3.38(.94)ab | 2.67(1.11)c | 1.94(.73)d |
| 関係性遠 | 3.36(.59)a  | 3.35(.63)a  | 3.16(.70)a  | 2.38(.53)b  | 2.15(.64)b |

註)異なる添え字は5%水準で有意差があることをしめす

表7 各関係性における否定的感情 (SD)

|      | 極高         | 高          | 中          | 低          | 極低          |
|------|------------|------------|------------|------------|-------------|
| 関係性近 | 3.24(.78)a | 3.34(.45)a | 2.80(.60)b | 2.51(.72)b | 1.88(1.40)c |
| 関係性中 | 2.55(.81)c | 2.41(.87)c | 2.12(.76)d | 3.15(.82)b | 3.65(1.03)a |
| 関係性遠 | 2.79(.74)c | 2.58(.85)c | 2.60(.84)c | 3.17(.90)b | 3.67(.61)a  |

註)異なる添え字は5%水準で有意差があることをしめす

表8 各関係性における安静状態 (SD)

|      | 極高         | 高          | 中          | 低          | 極低         |
|------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 関係性近 | 2.74(.36)  | 3.06(.34)  | 2.88(.72)  | 3.06(.44)  | 2.83(.69)  |
| 関係性中 | 2.07(.97)b | 2.62(.74)a | 2.63(.94)a | 2.18(.73)b | 1.82(.80)c |
| 関係性遠 | 2.63(.64)b | 2.69(.64)b | 3.01(.71)a | 2.47(.66)b | 2.13(.52)c |

註)異なる添え字は5%水準で有意差があることをしめす

はじめに「ふつう」認知に関して、平均値を従属変数として関係性3×地位5の分散分析を行ったところ、地位の主効果が見られた ( $F(4,249) = 22.15, p < .001$ )。中条件・高条件・極高条件は、低条件および極低条件より「ふつう」認知が高く、極低条件が最も「ふつう」が低かった (図5)。

次に感情状態に関して、因子ごとの平均値を従属変数とした関係性×地位の分散分析を行った。肯定的感情 ( $\alpha = .82$ ) において地位の主効果 ( $F(4,249) = 8.36, p < .001$ ) および関係性×地位の交互作用が見られた ( $F(8,249) = 4.17, p < .001$ )。極高・高・中条件はその他の条件より

肯定的感情が高く、極低条件が最も肯定的感情が低かった。多重比較の結果、関係性近条件においては地位によって肯定的感情の程度に有意差は見られなかったものの、関係性中条件においては極高・高・中は低、極低より肯定的感情が高く、さらに極低は最も肯定的感情が低かった。また、関係性遠条件において、極高・高・中条件は低・極低条件より肯定的感情が高かった (図6)。否定的感情 ( $\alpha = .87$ ) において地位の主効果 ( $F(4,249) = 2.37, p < .05$ ) および関係性×地位の交互作用が見られた ( $F(8,249) = 6.12, p < .001$ )。極高・高・中条件はその他の条件より

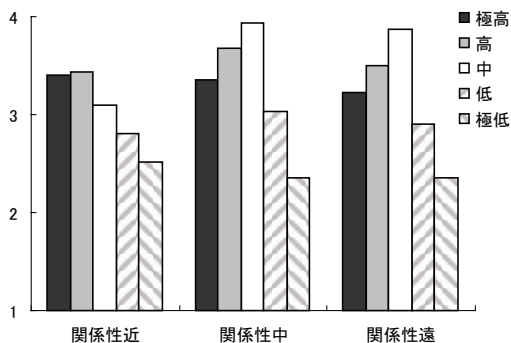


図5 各関係性における「ふつう」認知

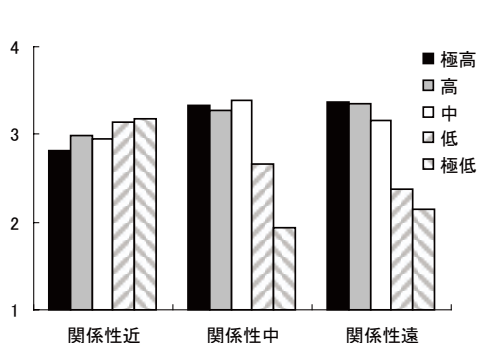


図6 各関係性における肯定的感情



否定的感情が低く、極低条件が最も否定的感情が高かった。多重比較の結果、関係性近条件においては極高・高条件は中・低・極低より否定的感情が高かった。関係性中条件においては、地位中条件が最も否定的感情が低く、次いで高条件・極高条件、低条件、極低条件の順に否定的感情は高かった。遠条件においては、地位中条件・高条件・極高条件の方が低条件、極低条件より否定的感情が低く、極低条件が最も否定的感情が低かった(図7)。安静状態( $\alpha = .77$ )において関係性の主効果( $F(2,249) = 15.11, p < .001$ )および地位の主効果が見られた( $F(4,249) = 4.39, p < .01$ )。関係性が近いとき最も安静状態が高く、中条件が最も安静状態が低かった。また、高条件および中条件は極低条件より安静状態が高かった(図8)。

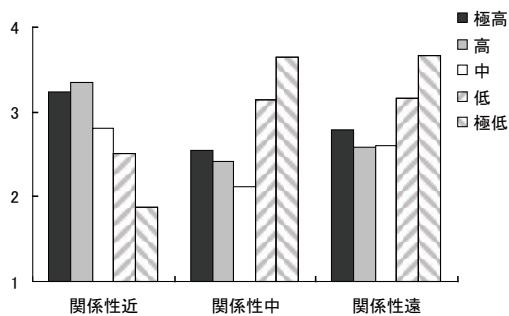


図7 各関係性における否定的感情

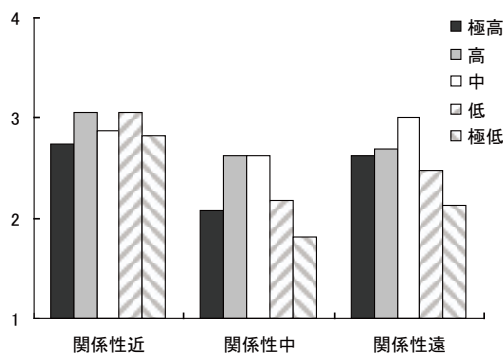


図8 各関係性における安静状態

### 3.3 考察

自らの遂行水準が「ふつう以上」であるとき、最も「ふつう」認知および肯定的感情が高く、否定的感情が低いことが示された。こうした「ふつう」認知と感情状態の関連は先行研究と整合する(高田, 2000; 佐野・黒石, 投稿中)。しかしながら、極度に高い遂行水準が安心感を脅かすことが示されたことから、単に「ふつう」より上であれば個人にポジティブな影響をもたらすとは言えない(佐野・黒石, 2008)。周囲と同等である、すなわち「ふつう」であるときに最も安心感が高かった点からも、周囲の他者を明確に規定した状況においては、自らの成績が極端に高いことは高い肯定的感情を導くものの、必ずしも望ましい状態であるとは言い切れない。極端に高い成績は周囲からの過剰なズレの意識となり、周囲との相違となる。日本人は、みんな一緒である規範を持ち(元橋, 1993)、「ふつう」であることに価値を置くために(大橋・針原, 2000)、たとえ個人にとってポジティブな違いであったとしても、周囲とのあまりに大きな相違は安心感を低め、不安な気持ちに結びつくと考えられる。

また、関係性の程度によって異なるパターンが見られ、関係が近い間柄においては遂行水準によって感情状態などにあまり違いが見られなかった。「ふつう」であるときに安静状態が高く否定的感情が低くなる傾向は、関係性が中および遠い間柄において顕著だった。自らが「ふつう」であるかどうかの意味を持つのは、関係性の調和が既に保たれている親しい間柄ではなく、関係性の調和に敏感でいなくてはならない準拠集団内での人間関係であることが考えられる。

### 4. 全体的考察

本研究は、自らの遂行水準が「ふつう」認知および感情状態に及ぼす影響を様々な関係性において検討した。全体的な傾向として、研究1・研究2ともに、遂行水準が「ふつう」であるとき安静状態が高く否定的感情が最も高い傾向が示された。

自らの「ふつう」さが意味をもつ関係はある程

度相互作用のある関係であり、近すぎる関係以外の間柄であることが示唆された。すなわち、既に関係が確立されている非常に親しい間柄ではなく、関係の維持に敏感でいなくてはならない間柄において「ふつう」であることが安心感をもたらすことが示唆された。元橋（1993）は、日本人が持つとされるみんな一緒であることを求める心理は「周囲から逸脱する不安」と関連することを示唆している。非常に親しい間柄においては、既に周囲に受容されていることが想定できるため、そうした逸脱への不安を感じるものが比較的少なく、「ふつう」であるか否かがあまり意味を持たなかったと解釈できる。

また、周囲と比べ高い遂行はポジティブな感情状態を導くことが示されているものの、必ずしも肯定的な意味を持っているとは言いきれない。高い遂行は、安心感を低め、特に親しい間柄においては否定的感情の高さに結びついている。「ふつう」であることが否定的感情の低さや高い安心感をもたらすという本研究の結果は、遂行領域において「ふつう以上」ではなく、まさに「ふつう」であることが望ましい意味を持っていることを実証的に示したと言える。日本人が関係性の調和の維持に関心を持ち、そうであるが故に「ふつう」であることを志向することが、関係性を具体的に規定することで示されたと考えられる。今後、「ふつう」であることが安心感をもたらすメカニズムに関して、原因帰属や効力感、動機づけなど様々な要因を考慮した包括的な検討が望まれる。

## 5. 引用文献

- 阿部謹也（2002）. 世間学への招待 青弓社.
- 遠藤由美（1995）. 精神的健康としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, 11, 134-144.
- 石黒裕・村上史朗（2007）. 関係性が自己卑下の呈示に及ぼす効果 社会心理学研究, 23, 33-44.
- Kitayama, S., & Markus, H.R. (1994). *Emotion and culture: Empirical studies of mutual influences*. Washington, D. C.: American Psychological Association.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991). Culture and self, implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 2, 224-253.
- 元橋豊秀（1993）. 人並み志向と平準化志向 社会心理学研究 9, 1, 1-12.
- 村本由紀子・山口勲（1997）. もうひとつのself-serving bias：日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について 実験社会心理学研究, 37, 65-75.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人（2000）. 一般感情尺度の作成 心理学研究, 71, 3, 241-246.
- 大橋恵（2006）. ふつうなら、満足？：フィードバックされた成績が心理テストの妥当性評価に与える影響 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 14-15.
- 大橋恵・針原素子（2000）. 自分を「ふつう」だと認知することは自己評価を高めるか？ 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 20-21.
- 佐野予理子・黒石憲洋（印刷中）日本における「ふつう」の意味：自己改善動機の観点から 対人社会心理学研究
- 佐野予理子・黒石憲洋（2006）. 「ふつう」であることの安心感（1）. 日本心理学会第70回大会発表論文集, 215.
- 佐野予理子・黒石憲洋（2008）. 「ふつう」であることの安心感（5） 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 273
- 高田利武（2000）. 日本人の「非自己高揚・自己批判傾向」再考—その規定条件と感情体験の実験的検討— 日本心理学会第64回大会発表論文集, 162.
- 高田利武（2004）. 「日本人らしさ」の発達社会心理学 自己・社会的比較・文化 ナカニシヤ出版.

## 註

- 1) 本論文の内容は、日本教育心理学会第49回大会および日本グループ・ダイナミクス学会第55回大会において発表された。